

玉はとびちる (みのぶ)

玉はとびさる
青いろ水は
みをやたまやに
ほろとなく

ちらりくくご (寮の窓から)

ちらりくくご
涙に光る
星のなくのに
なせなかぬ

菊

久遠寺の庭に咲きける白菊の心うれしく香りつるかな
田川 恵良
白菊の盛りと見ゆるさ庭べに朝日さすなり寺の静けさ
同
久々にみ山訪づれ庭菊のなつかしう見ゆ花の色と
同
香

さ庭べの東をさして咲き匂ふ園にはの見ゆ菊のま盛り
同

山寺に菊の盛りとなりぬれば土の香いこゝなつかしき哉
同

我が庭に秋訪れて白菊のいま、盛りと咲きにはふたべ
同

鉢菊の枯れたる夕べに法の雨恵みに生えて又盛りぬ
同

秋ふけて薄き黄色に咲き出づるさ庭の小菊懐かしき哉
同

杉桓のもとに一本寒菊は霜にうたれて淋しく笑めり
下田 雨女

秋 愁

夜もすがら吹きにし風にもなやむ昔の衣につゆ結びけり
田川 恵良
秋くれば寂しさましぬさ庭べに鈴虫の啼く夕べなるかも
同
もの憂ふるわが此の頃の顔をやせませりよご君はいわるも
今 泉 智 旭
つくづくそわが淋し顔をながめゐる我が身の如く君

は悲しむ

同

二ツ三ツ取りのこされし柿の實の色さむげなり冬の

山畑

太田 赤童

たゞ一つ濡れたる如く光る星の君があゝの夜のまなざ

しににて

同

母の手にポタリとをちる涙見ていすまいなほす小

き妹

同

北國の空をながめて今日も又母と妹としみじみと思

ふ

同

ひぐらしの聲もかそける啼ける目を友病むと聞き涙

すわれは

同

思 出 草

前の世は兄弟ならめ此の二人あまりに奇しき運命な
るかな

今泉 智 旭

語らひの重なる程に運命のあまりに似たる二人なる

かな

同

此の惱み此の愁だになかりせば永久に二人知らざり

しならめ

同

同じ道同じ惱みを辿り來て佛の仕ふる奇しき縁

よ

同

しつしつと生命の壺を捧げてゆく手おのゝきし若き

日のわれ

太田 赤童

低唱はうちさびしくもしみじみとわが聲ふるふ悲し

みのわく

花島 涙草

明 暗

必ずも僧侶であつて呉れませよ辛棒しませとはげま
せり君

今泉 智 旭

魔の神のいごゝ我が身を襲へごも我は動かじ心やす

かれ

同

うづ高き文にうもるゝ法の子の末の望みは燈臺の

守

太田 赤童

寺平一本松のもとに來て傾きくるゝ夕日をぞ見

る

同

曉の雲たなびける山の嶺の晴間より見ゆ眞白き美女

がれ

同

讚經のこえ波うつゝ朝堂の光影もれ來し朝のたうと

ささ

江原 白線

樵夫は斧をおさめて歸り來む鳥はねぐらに我はこゝ

ろに

同

老ひの身に星を頂き月を踏む野山の業もわ子を思へ

ば 戸田 峯 仙

未せ世のわれ等をすくふ法の聲いゝど貴く我が胸を

つく 花鳥 涙草

不輕品の「我深敬汝」のみことばを大地にびたり耳あ

てゝきく 同

自然の瞳

秋くれば野山の神は菊園に月はきらめく露に宿ら

ぬ 田川 恵 良

たをやめの黒かみときて瀧の端の白き肌へに白玉の

散る 江原 白 線

そよ風に散るもみぢ葉はいとしくも我をたいて訪

づれにけり 下田 雨 女

白糸の瀧端に立てる乙女子の姿尊し羽衣の

橋 太田 赤 童

風なげる秋の夕べを音もなく庭もせに散る會式櫻

は 同

天の川さやけくはれて七面の峯に星ふる逝く秋のそ

ら 同

冬の日に山の庵ののきの端に小さき蜘蛛の住家つく

りぬ 同

山 寺 東 溟

鐘聲迥出最高層青壁無梯不可登

千壑萬峯生暝色一樓有箇看雲僧

同

梵宮高出白雲層露欲爲霜月氣凝

一点燈光透疎木上方應有坐禪僧

同

隔崦清鐘一杵傳禪扉半掩夕陽天

石泉白咽僧無語雲冷山茶花落前

同

木魚石磬上方聞 尋到禪關樹竹分

端的入房先問道 老僧笑指一峯雲

送 僧

楚水吳山不計程 無心端的是平生

問君錫杖歸何日 笑指行雲一片輕

行 脚 僧

偶爾隨緣出翠微 一瓶一錫一麻衣

白雲猶是時歸岫 三界無家何處歸